

人権教育に関する特色ある実践事例

| | |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 基準の観点 | <ul style="list-style-type: none">・学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例・学校としての点検・評価が組織的に行われ、PDCAサイクルが効果的に機能している実践事例 |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

静岡県賀茂郡西伊豆町

○学校名

西伊豆町立田子小学校

○学校のURL

tagosyo@town.nishiizu.shizuoka.jp

2. 学校紹介

○学級数

・通常学級各1学級、特別学級なし、合計6学級

○児童生徒数

・66人(平成25年11月11日現在)
(内訳1年生10人、2年生16人、3年生11人、4年生9人、5年生9人、6年生11人)

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

・学校教育目標 「はい 私は 田子小の子です」～いい顔 いい声 いい心～
・人権教育に関する めざす児童像 「あったか言葉のあふれる生活をする子」
「学び合いを楽しみ学びを実感できる子」

○人権教育にかかる取組の全体概要

○学校の教育活動全てを通じて実践する取組

- ・あいさつ運動 自分から元気よくあいさつをする
- ・「さん」づけで名前を呼ぶ
- ・チクチク言葉を使わない

○児童の自主性を尊重した指導方法の工夫

- ・児童会を中心とした児童会企画による挨拶推進運動
- ・児童同士注意し合って「さん」づけを推進したり、相手を傷つける言葉を使わないようにしたりして温かい人間関係をつくりあげていく。

○人権教育推進に関する点検・評価アンケートの教職員・児童生徒・保護者各層への実践及びその結果の分析活用

- ・児童、保護者、教職員に人権教育に関する評価アンケートを実施し、実態と進捗状況の点検をする。その結果を職員で分析しこれからの指導に生かしていくように、学校評価者委員会、保護者に伝えていく。

○家庭・地域との連携

- ・懇談会で家庭からの意見や日常の地域からの情報に対して具体的に指導したり状況を伝えたりして地域の教育力の協力を依頼して連携を図る。

3. 特色ある実践事例の内容

- ・取組のねらい、目的
相手のことを配慮した声かけ（挨拶・言葉づかい）、さんづけなどを通して相手のことを思いやる人権意識を高めていくようにする。
- ・取組を始めたきっかけ
固定化された集団のため、相手を思いやる気持ち（言葉づかい、呼びすて）を伝えることが少ない。相手に対するコミュニケーションのとりかたを通して人権意識を高めていこうと考えたのがきっかけである。
- ・取組の内容
数値目標をたてて取り組んでいる。
自分から元気よくあいさつをする。（90%）
「さん」づけで名前を呼ぶ。（70%＜今年度は授業中の取り組みから生活全体に拡大して取り組む。＞）
チクチク言葉を使わない。（90%）
- ・取組の主体や実施体制
学校目標を具体化する評価重点目標として取り上げ、職員の積極的な取組がある。
また、児童会などを通じた児童主体の取組もある。
- ・取組の頻度について
学校生活全体で取り上げ、全職員で取り組んでいる。

4. 実践事例の実績、実施による効果

- 先生や友だち・地域の人に自分からあいさつしている。
(H24前期94%→H24後期96%→H25前期97%生活全体での取組)
「さん」づけで友だちの名前を呼んでいる。
(H24前期78%→H24後期98%→H25前期79%)
相手を大切にしたい言葉づかいチクチク言葉を使わない
(H24前期81%→H24後期83%→H25前期85%)
- ・取組が効果を上げた実際の事例
「さん」づけすることが日常化してきている。上級生が下級生に対しても「さん」づけで呼ぶことが増えてきており、言い直しをするときが見られるようになってきている。

5. 実践事例についての評価

- 取組についての評価、及びそう評価する理由
子どものアンケートから、昨年度と比較して「さん」づけ、チクチク言葉など子どもたちの数値が下がってきている。子どもたちの意識が「できるようになってきた」から「できるのが当たりまえ」という感覚になってきている。
- 保護者や地域住民からの反応
挨拶については、地域から賛否両面の意見がよせられており、心のキャッチボールとしての挨拶を「いつでも」「どこでも」「だれにでも」できるような取組を始めている。
- 現在、実施にあたって課題と感じていること
学校生活を離れるとやらなかったり、継続的に声をかけていかないと定着しなかったりすることがある。継続的に意識した指導が必要になってくる。